ロンドン日本人学校の教育

札幌市立藻岩南小学校　岩村　鋭介

１．英国の概要

（１）成り立ち

英国はヨーロッパに位置するが，大陸の国々とは違って，日本と同様の島国である。私たち日本人にとっては，歴史的にも様々な関わりがある国でもある。しかしながら，その国土の様子や歴史を細部にわたって比べてみると，様々な違いも見られる。

英国は大部分が低い土地で，特にイングランド地方ではなだらかな丘陵地帯が広がっている。スコットランド地方やウェールズ地方には山地があるが，最も高い山でも１３４４m しかない。耕地としては，その多くが小麦畑や牧草地に利用されている。

ロンドンは大都市だが，住宅価格や土地価格が東京と比べて安く，人々は平均して広い住宅に住んでいるが，近年では上昇傾向にある。多くの家には庭があり，芝生や花々が植えられている。イングリッシュ・ガーデンという言葉で知られるように，人々は寛ぎの場である庭を，いつまでも美しく保とうと努力している。町の中にもたくさんの公園や緑地帯がある。そこには手入れの行き届いた芝生が広がり，スポーツをしたり日光浴をしたりする人々の姿が多く見られる。日本の都市と比べて緑が多く，そこに棲む野生のリスや小鳥の姿は，人々の生活に安らぎや潤いを与えている。少し郊外に出ると，広大な牧場で牛や羊がのんびりと草を食べている風景を見ることができる。

このように，同じ島国でありながら，生活様式や土地利用の違いから，周囲の景観は大きく異なっている。

また，日本では「英国」「イギリス」という言い方が一般的であるが，これは日本のみで通用する言い方である。そもそも，この国を指す言葉として，「イングランド」「イングリッシュ」を「英吉利」と表記したところから「英国」「イギリス」という言葉が生まれたようである。一般的には，英国を表す言葉として「Ｕ．Ｋ．」を用いる。国際郵便で表記する時も「Ｕ．Ｋ．」を用いる。テレビや新聞等でも同様である。「Ｕ．Ｋ．」とはＵｎｉｔｅｄ　Ｋｉｎｇｄｏｍ　ｏｆ　Ｇｒｅａｔ　Ｂｒｉｔａｉｎ　ａｎｄ　Ｎｏｒｔｈｅｒｎ　Ｉｒｅｌａｎｄ(グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国)の頭文字をとったもので，英国全体を表す言葉である。

ただ，この国において全ての場合に「Ｕ．Ｋ．」が用いられているかというと，必ずしもそうではない。サッカーの国際大会には，この国から4つのチームが出場する。この例からも分かるように，人々の意識にはイングランド人，スコットランド人，ウェールズ人，アイルランド人などと，独自の伝統や文化を背景にした民族意識が強いことも事実である。

私たちは，英国のことを単一民族国家と誤解しがちであるが，それはアングロサクソン→イングランド→イギリスという言葉の派生から生まれてきたと考えられる。実際のこの国は，ケルト，ローマ，ピクト，アングロサクソン，デーン，ノルマンという人々が長年の歴史の中で作り上げてきた国家であるという認識が必要であると言える。

それでは，Ｕｎｉｔｅｄ　Ｋｉｎｇｄｏｍ　ｏｆ　Ｇｒｅａｔ　Ｂｒｉｔａｉｎ　ａｎｄ　Ｎｏｒｔｈｅｒｎ　Ｉｒｅｌａｎｄの大まかな形成過程について年表を利用して触れておく。

西暦	主な出来事
Ｂ．Ｃ．７世紀頃	ケルト人の侵入
Ｂ．Ｃ．５５	カエサルのブリタニア侵攻
Ａ．Ｄ．４５	ローマ支配による支配が始まる
４４９	アングロサクソンの本格的侵入開始
８２７	ウェセックス王国の覇権確立
１０１６	デーン人カヌートがイングランドを征服
１０６６	ヘースティングスの戦い　ノルマン公がウィリアム1世として即位

１２１５	ジョン王が大憲章に署名
１２７７	エドワードⅠがウェールズを征服
１３２８	スコットランド王国を承認
１３３７	百年戦争が始まる(～1453)
１４５５	バラ戦争が始まる(～1485)
１５３６	ヘンリーⅧがウェールズを統合
１５５８	エリザベスⅠ即位
１５８７	スコットランド女王メアリ・スチュアートを処刑
１６２８	権利の請願を提出
１６４２	清教徒革命
１６８８	名誉革命
１７０７	イングランド・スコットランド統合 (この頃産業革命)
１７７５	アメリカ独立戦争(～1783)
１８０１	アイルランド併合
１８３７	ヴィクトリア女王即位
１９２２	アイルランド自由国成立・
１９５２	エリザベスⅡ即位

（２）国のしくみ

英国は立憲君主国であり，現在の君主はエリザベス女王である。王冠は女王に授けられるが，一般に政治の機能は，国会に対して責任を負う大臣によって果たされるので，英国は女王の名において女王の政府によって統治されていることになる。しかし，政府の重要な行為には，依然として女王の関与が必要である。

①国会

女王は，国会の召集，閉会，解散を行う。女王は通常，政府により女王のために書かれた，政府の計画概要を説明するスピーチを王座から行って，国会の新しい会期を開会する。法案が法律として成立するには，女王が同意を与えなければならない。この同意は，上下両院に発表される。

②司法

女王は，大臣の助言に基づいて，犯罪で有罪宣告を受けた人々に恩赦を行う。法律上，女王は私人として犯罪を犯すことはない。女王は民事または刑事訴追を免除されており，法廷に訴えられることがない。この特権は，他の王室メンバーには与えられていない。

③叙勲と任命

女王は貴族や騎士の爵位，その値の勲章を授与する権限を持っている。通常は，首相の推薦に基づいて行うが，女王が個人的に授与する勲章も若干ある。また，女王は，首相や関係閣僚の助書に基づいて，多くの重要な国家官職への任命を行う。

④枢密院

女王は枢密院の会議を主宰する。これらの会議では，とりわけ，国王の大権または法令に基づいて行われた枢密院命令が承認される。国王の大権は，主に憲法上の慣例(法律の一部ではないが，政治機構にとって不可欠と見なされる規範)によって規制されている行政府権限から構成されている。ほとんどあらゆる場合，女王の大権に関係する行為は国会に対して責任を負い，政策に関する質問に答えることのできる大臣によって行われる。国会は女王の大権を廃止または制限する権限を持っている。女王は，国民生活のあらゆる側面について知らされ，意見を求められるほか，大臣の参考のために非公式に自分の意見を自由に述べることができる。

⑤憲法

英国の憲法は，何世紀にもわたって発展してきた。アメリカやフランス，多くの英連邦諸国の憲法と違って，英国の憲法は一つの統合した書類にまとめられたことは一度もない。その代わり，英国の憲法はコモンローと制定法，慣例から構成されている。英国には一定の重要な基本的文書があり，その中には王権に対して社会の権利を保護しているマグナカルタ(1215年)，国会の権利を拡大し，君主が政府の無視することを事実上不可能にした権利章典(1689年)，国会代表制度を改革した選挙法改革法(１８３２年)などがある。

コモンローは正確に定義されたことは一度もない。これは慣習または裁判の先決例から推論され，裁判で判事によって解釈される。慣例には，法律的強制力はないが，政府が機能するために不可欠とみなされている規範や慣習である。例えば，大臣はその担当各省で起こったことに責任を持ち，これについて説明する責任がある。これらの多くの慣例が，英国の行政制度の発展のもとになった歴史的事件から生まれている。

（３）文化・人々

18世紀の文豪サミエル・ジョンソンの言葉に次のようなものがあります。

「ロンドンに飽きた人はこの世に飽きたも同然だ。なぜならば，ロンドンにはこの世のすべてがそろっているのだから。」

英国は，非常に奥深く興味深い文化を持った国である。

例えば，劇作家のシェイクスピアを筆頭に，「不思議の国のアリス」のルイス・キャロル，詩人ワーズ・ワース，名探偵シャーロック・ホームズを生み出したコナン・ドイルなど，世界中に知られている作家による文学があげられる。

また，毎日のように公演されているミュージカル，今でも多くのファンを魅了しているビートルズの音楽などは，伝統的な芸術活動と共に，人々の生活に根ざしている。

さらに，ゴルフ，テニス，クリケット，サッカー，ラグビーなどのスポーツが生まれたのもイギリスである。これらのスポーツも，格式の高い国際大会が開かれると同時に，市民の生活の中にも取り込まれている。

町並みに目を向けてみると,100年以上を超えて人々の生活の場となっている建物が多く見られる。むろん近代的な建物もあるが，周囲との調和や町並みの景観を損なわないように配慮して建てられる。

このように，古いものと新しいもの，伝統と革新が調和して現在の文化，さらに未来の文化を築こうとする意識がはっきりしているのが，英国の特徴である。

①余暇の過ごし方

英国人の一般的な余暇活動は，家で過ごしたり，外出して人と会ったりすることである。家でテレビやビデオを見たり，ラジオを聞いたりするのが最も一般的な余暇の過ごし方のようである。

音楽鑑賞もポピュラーな余暇の過ごし方で，クラシック，ポップとロックが人気のある音楽と言える。

大人が家庭以外で過ごす最も一般的な自由時間の過ごし方は，パブへ行くことである。パブは，日本でのファミリーレストランや喫茶店のように，気軽に利用されている。家族との団欒の場，気軽な社交の場，スポーツ観戦の場として，英国の人々の生活に欠かせないものである。

他にも，演劇や映画鑑賞も盛んである。ロンドンには１５００軒以上の映画館があり，１００軒以上の劇場がある。英国で最も有名な劇団「ザ・ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー」は，シェイクスピアの生地ストラトフォード・アポン・エイボンとロンドンとで公演をしている。

スポーツでは，広々とした公園を散歩したり走ったりしている人をよく見かける。また，男性にはゴルフ，クリケット，サッカー，スヌーカー(玉突き)などが人気があり，女性はスイミング，フィットネスクラブ，ヨガなどに通う人が多い。これらの姿から健康で快適

に暮らそうとする人々の意識の高さを感じることができる。
　また，憩いの場としての庭づくりにも余念がない。それぞれが自分の気に入った庭を作ろうとして,休日には花を植えたり芝を刈ったりしている。

④マイノリティー(少数民族)
　英国には，多種多様な民族がロンドンなどの大都市を中心に住んでいる。主だった民族を紹介する。
　まず，最大のグループはカリブ系またはアフリカ系の人々である(87.5万人)。次に多いのがインド系(84万人)，さらにパキスタン/バングラディシュ系(64万人)である。
　全体としてこれらの少数民族は，グレート・ブリテン島の総人口の約6%を占めている。少数民族人口は，1950年代から1960年代にかけて，カリブ海地域と南アジアの旧植民地からの大量移民で急増し，その後も徐々に増えてきた。さらに1970年代には，ウガンダを追われた約28000人と東南アジアからの約22000人の難民を受け入れた。
　その他にも，中国人，ギリシャ人，トルコ系キプロス人，ポーランド人，オーストラリア人，イタリア人，ニュージーランド人，アメリカ人，カナダ人などが数多く住んでいる。
　大都市ロンドンでは，多民族国家であることが容易に実感できる。道行く人々の人種は多種多様であり，日本人の多く住む場所でも，様々な人種の人々が見られる。そのせいか，日本人に対しても特に奇異な目で見られるということはなく，逆に私たちが英国人に道を訪ねられることもしばしばあった。

（４）気候
　英国は，緯度から見ると日本よりかなり北に位置している。そのために，非常に寒いのではないかと思われがちであるが，暖流の北大西洋海流と偏西風の影響で，厳しい寒さではない。また，夏も気温は上がるが，日本と比べて蒸し暑くなることもなく快適に過ごすことができる。夏場の降水量は，東京の約半分か1/3くらいである。
　気温や降水量の年較差は，日本よりはるかに小さい気候である。反面，高い山がないことも影響してか，雲の移動が激しく，一日の中で天気が目まぐるしく変わる。朝は土砂降りであっても，午後は晴れて気温が上がり，夕方には風が強くなって冷えてくるというような変化も珍しいことではない。
　ロンドンの季節の移り変わりは次のような様子である。
(4・5月)
　一般的に天候は不安定である。一日の中で天気は目まぐるしく変わり，シャツ1枚で過ごせるかと思えば，コートを羽織りたいと思う日もある。雨が降ったり止んだりしている日が多くある。
(6月)
　ロンドンでは，一番よい季節である。天気が比較的に安定し始め，爽やかな日が多くなる。様々な花が咲き始め，各地でフラワーショーが行われるのもこの時期である。家々の庭に植えられているローズが，美を競うように咲き始め，町を歩くだけで微かな香りが漂ってくる。また，夜９時頃まで明るく，人々は仕事が終わった後の時間を有効に使って生活している。

(7・8月)
　日本では蒸し暑く過ごしにくい季節だが，ロンドンは日本の高原のような気候で，気温が上がっても木陰に入れば涼しさを感じる。時には冷え込む日もあり，7月でもヒーターをつけることがある。町に出ると，半袖姿の人もいれば長袖のジャンバーを着ている人も見かける。
(9・10月)
　2学期が始まる頃からすっかり秋めいてくる。部屋にヒーターを入れる日も多くなる。日

も次第に短くなり，暗くて寒い冬が近づいていることを感じ始める。しかし，突如として夏が戻ってきたと思わせる陽気が続くこともある。人々は，この陽気をインディアンサマーと呼んでいる。このインディアンサマーが終わると，季節は一気に冬に向って動き出す。サマータイムが終わるのもこの時期である。

(11～3月)

朝出勤する頃はまだ薄暗く，子どもたちが下校する午後4時にはもう日が暮れるという日々が続く。雨が多くなり，どんよりした日が続く。氷点下にまで下がることはほとんどない。寒くて雨が多い冬は，ロンドンに住む人にとってつらい季節かも知れない。ミュージカルやシアターなど屋内での娯楽が盛んになっている理由も，この天候にあるのかも知れない。

家にはセントラルヒーティングが完備されており，トイレや浴場にもその設備がついている。各家の屋根には必ず煙突がついているが，今はそれを使う暖炉はなく，全てヒーターによる暖房になっている。煙が出なくなったおかげで，霧のロンドンというイメージはなくなった。(霧の発生は，煙突からの煙が原因であったと考えられている)

3月に入ると，少しずつ春の気配が感じられるようになり，スイセンやアーモンドチェリーの花が見られるようになる。しかし，年によっては，3月下旬まで，冬の気候が続くことがある。

２．ロンドン日本人学校

（１）ステイタス

ロンドン日本人学校は，英国の法に基づき，日本クラブによって私立学校として設立された学校である。あわせて，日本国文部科学省により認定された学校でもある。教育課程は文部科学省の定める学習指導要領に準拠し，同時に在外教育施設としての特色を加味したものとなっている。

月曜日から金曜日までの週5日制のため，時数が確保できるように小学1年生で週３回，2年生で週４回，3年生以上は毎日が6時間授業である。

主な行事は，運動会・遠足・修学旅行・進路講演会・文化祭(演劇)・写生大会・日曜参観・社会見学・職場体験・現地校との交流会などである。

また，英国ならではの教育活動として，小学1年から英会話の授業が週2，3時間位置づけられている。小学校１・２年生は，学級担任と英国人教師による英語活動の時間が週１時間位置づけられている。

（２）児童生徒

小・中学部併設で，児童生徒数は４６９名(平成１６年４月１５日現在)である。ここ数年は減少傾向にあり，在籍数は徐々に減少している。転出入が大変多く，年間１／３近くの子どもが入れ替わってしまうこともある。日本企業などに勤務している家庭の子女がほとんどである。学力は比較的高く，学習指導もスムーズに展開することができる。また，学校行事などにも積極的に取り組める子が多く，児童生徒主体の自主的な運営が行われている。

（３）学習指導

小学部も全教科を担任が受け持つのではなく，一部教科担任制をとりいれている。指導にあたっては，経験に関係なく両学部を指導することもある。

平成１４・１５年度には文部省の指定を受け，公開研究発表会も実施している。

（４）校内研究の概要

平成１６年度の研究は，「国際性」に研究の焦点を絞り込んだ。「国際性」というものは何であるか，子ども達がどのような姿に育っていけば「国際性が育った」ということができるか，また，どのような方法でそれを評価していくことができるか，ということを研究の主題に設定した。総合的な学習の時間と小学部１・２年部で行っていた英語活動の時

間を中心に，全校で実践に取り組むことで，小中９ヵ年を見通した評価規準づくりと授業改善を目指した。

研究主題 在外教育施設の特色を生かした国際性を高めるための評価研究 ～小中９ヵ年における評価規準作成と授業改善～

①研究主題について

ロンドン日本人学校は，長い期間にわたり，現地校交流や社会見学等において児童生徒に英国の文化や歴史について考えさせたり，体験させたりすることで，国際性を高められると考え実践してきた。これは，英国に住む人々や現地教材に触れる機会を多く持ち，実際に英語で意思疎通を行ったり，英国と日本の風習，季節行事，社会制度を比較したりする中で，視野を広げ相互理解の重要性に気付かせることを目的としていた。

児童生徒の一人一人を観察すると，そのような交流や活動を組むことで，多くの場合，英語によるコミュニケーションへの積極性が向上したり，英国等の文化に対する興味関心が大きく喚起されたりすることに気付いた。しかしながら，その高まりがどの程度のものなのか，何を持ってどの観点から，その高まりを評価するべきかについては，明確になっていないと考えた。

例えば，現地校の児童生徒と学校生活を送りながら交流する現地校来校の日がある。各学年単位で工夫を凝らし，本校児童生徒ができるだけ多くの機会をとらえ，現地校生と話す・遊ぶ・学ぶなどの活動を組む。交流はわずか1日であるが，その当日までの準備を含め，児童生徒は，現地校生の生活や考え方など自分たちと異なる文化背景を持つ人物に接する上で重要なことを学習する。単に英語力があるかないかといった一面的な学びではなく，心を開いて相手を受け入れる態度や，相手に自分の気持ちや考え方をどのように伝えるかなどを学び実践する機会となる。

この一連の学習過程は，国際性を高める典型的な例であると言ってよいと考える。しかし，手だてを整え，指導を行い，児童生徒が活発に現地校生と交流しても，その国際性がどの程度高まったかは，児童生徒の感想や教師の観察の中で，主観的な判断をせざるを得なかった。これは，国際性を一言で定義づけることが極めて難しいことや，学校教育活動と国際性の育成がどのように関連付けられるかを整理できなかったためである。また，「国際的」と考えられる学習活動相互の関連が見付け出せなかったこともその一因と考えられる。

そこで，１６年度の研究では，国際性の評価に視点をあて，小中９ヵ年の評価規準を作成し，児童生徒の国際性の伸張を的確に評価しようと考えた。様々な要素の絡まった国際性を，本校で定めた観点から評価し，そのことにより，指導者によりとらえ方がまちまちであった児童生徒の国際性の育ちを，共通の基盤に位置付けることができると考えたからである。

そのためには，国際性育成の観点と児童生徒の発達段階の関係から導き出される評価規準の作成が必要となると考えた。また，国際性育成の観点からこれまでの教育活動を見直すことで副次的に指導法の改善もなされることを期待し，このような研究主題のもと，研究をおこなった。

②国際性の育った児童生徒像と評価の観点

国際性について考察する際，対象となる人々の社会・文化的な位置付けや歴史的背景によって大きく異なり，一概に定義づけることは難しいと考えた。そこで，国際性のとらえをロンドン日本人学校の児童生徒の理想的な姿として次のようにとらえることとした。

「国際性」が育った児童生徒像 受容的態度や文化理解，思考力・表現力，言語スキルを兼ね備え，自己の意志や価値観に基づき実践的な行動ができる児童生徒

国際性の育ちは，児童生徒の内面で行われ，見えにくい上，多角的で多面的である。そのため複数の観点を設けてその状況をとらえた。これらの観点から児童生徒の国際性伸長の

状況を分析的に評価し，国際性が豊かになったかどうかの総括的評価を行った。
＜国際性の育ちをみる４観点＞
ア【受容的態度・文化理解】･･･自己の存在を見つめ，異質な他者の存在とともに肯定的に受け入れようとする。
キーワード 心を開く　理解する
イ【思考力・表現力】･････････母国語を活用して考えを作り，多様な方法で表出しようとする。
キーワード 調べる　考える　表す
ウ【言語スキル】･･････････････英語に関して言語活動に必要なスキルを身に付けている。
キーワード 親しむ言葉　伝え合う言葉
エ【行動力】･････････････････自分の意志や価値観に基づき，行動しようとする。
キーワード 実行する　実現する

観点	キーワード	評価の内容・場面
受容的態度 文化理解	心を開く	文化背景の異なる人物や風習，生活様式に対する態度
	理解する	異文化の生活様式，社会制度等に対する理解
思考力・表現力	調べる	調べ方　手段　情報収集　整理の方法
	考える	情報を自分で解釈・判断する様子
	表す	目的と対象を考えた表し方
言語スキル	親しむ言葉 伝え合う言葉	親しくなるための英語力　あいさつ　自己紹介 考えを表すための英語力　問答　意見交換
行動力	実行する	授業で取り扱った内容を日常生活で生かす態度
	実現する	将来において，自分の考えを実行する意欲

さらに，この４観点で実際の児童生徒の活動を評価しようとしても漠然としている。そこで，児童生徒の具体的な行動の表れをキーワードで端的に示した。これらのキーワードから，各学年の実態に合わせた評価規準（児童生徒がおおむね達成できる到達度），単元目標を作成し，さらにそこから各授業のねらい(具体的な到達目標)を設定した。

③研究の内容
本校教育活動における国際性の観点設定と評価規準等の作成を具体的に進めるために研究の内容を以下の3点に焦点化した。

○児童生徒の国際性の高まりをみる評価規準を仮作成すること。
○仮作成した評価規準を実際の指導を行いながら修正を加え妥当性を高めること。
○教師個々により異なりがちになる児童生徒のとらえ方を共通化すること。

④研究の方法
まず総合的な学習の時間や英語活動における児童生徒の変容を予想することにより暫定の評価規準を設定した。その後，授業実践を行い，児童生徒の学習活動時の実態を通して，その実態に適した評価規準であるかを検証していく方法を行った。同時に，児童生徒の国際性の伸長をどのように評価するか，その方法も実践ごとに提案を行った。

評価規準の仮作成→授業実践→評価規準の見直し・検討→評価規準の作成

⑤評価規準作成例
小学校低学年においては，担任による週１時間の英語活動を研究の重点として，評価規準を作成した。評価規準を年度当初に仮作成し，６つの授業実践を通して，年度末にロンドン日本人学校独自の英語活動における評価規準を作成した。次頁は，小学校Ｉ学年の評価規準である。